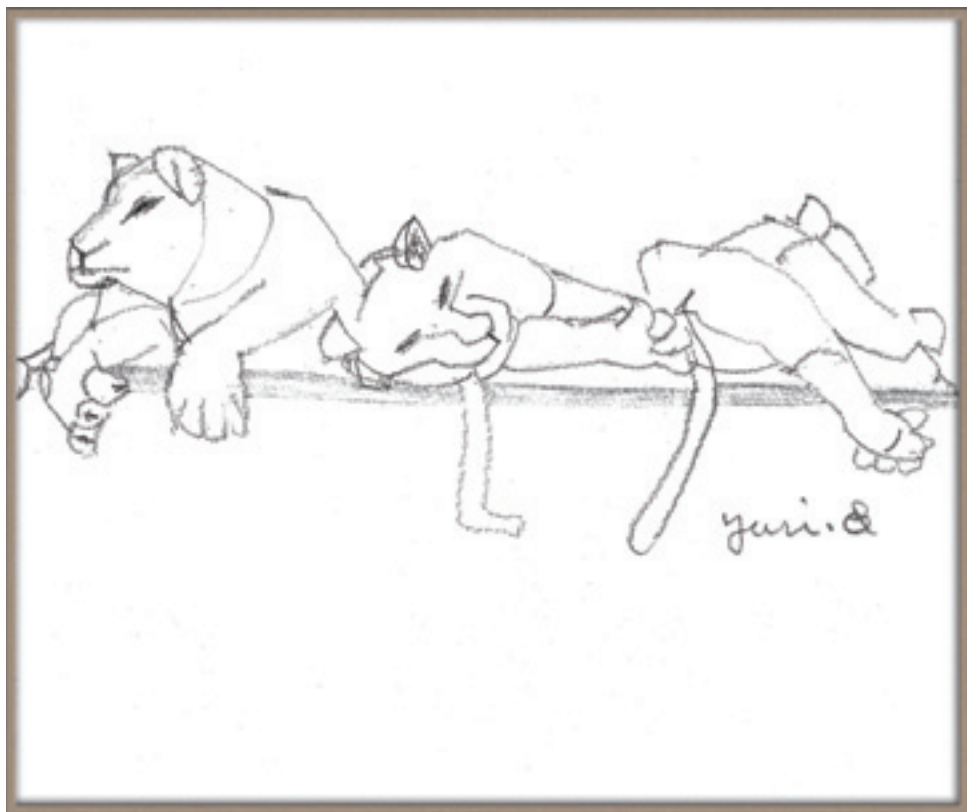


# 三河アララギ

平成二十六年

四月号

第六十一卷 第四号



ニューヨーク日記(90) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

November 17, 2013 : Montreal

## Blue Shoe Diaries



近所のモントリオールに来てみました!最近ここが美味しいって色々聞いたから!町もかわいいし、フランス語もたくさん聞こえてくるし。何かいい感じ!目当てのレストランもいくつかあってかなりハイレベルに美味しかった!! 飛行機で一時間半で来れちゃうのよね~また来ようっと! 写真はノートルダムです。奇麗だよな!

Flying over to Montreal, Canada. It's only an hour and a half away from NY! It's a really cute city with really incredible restaurants! And people speaking French :) I don't know why it's taken me this long to pay a visit here. Here's beautiful Notre Dame in the old town. Gorgeous, no?

# 目次

## 第六十一卷第四号(通卷七二四号)

表紙	ライオン
ニューヨーク日記(90)	
感銘歌	御津磯夫第十歌集
歌集「スモン」	
春の雪	
神様	
去年と変わらぬ	
感謝の祈り	
一枚の写真	
春を待つ	
吉祥山	
二月の光	
何が常識	
「ありがとうね」	
土肥桜	
残人の雪	
木挽町	
鎌倉	
以心伝心	
拍手	
雪像	
駅弁	
キラン草	
如月	
喜怒哀楽	
明けの明星	
ひむがしの	

今泉	由利	(1)
Blue Shoe		(2)
大須賀寿恵		(4)
岡本八千代		(5)
今泉	由利	(6)
弓谷	久子	(7)
青木	玉枝	(8)
内藤	志げ	(9)
林	伊佐子	(10)
安藤	和代	(11)
佐藤	喜仙	(12)
伊藤	忠男	(13)
遠藤	脩子	(14)
鈴木	孝雄	(15)
足立	晴代	(16)
森岡	陽子	(17)
小柳	千美子	(18)
胃甲	節子	(19)
清澤	範子	(20)
富岡	和子	(21)
伊与田	広子	(22)
半田	うめ子	(23)
近藤	映子	(24)
杉浦	恵美子	(25)
平松	裕子	(26)
小野	可南子	(27)
		(28)

絵はがき	
紅の箸	
夜の明けるまで	
姫塚	
『ことよせ』	
『かさね』の一句	三月号
『俳句』	
『歴代天皇御製歌』(二十三)	
私の一首	
ある自然科学者の手記(23)	
絹の話(41)	
物理学者と詩歌の世界(51)	
短歌に詠まれた茂吉	
楽しい時間(17)	
茅場町また亀井戸(1)	
「水魚」のことから(159)	
ことのはスケッチ(424)	
編集室だより(二〇一四年二月)	
和菓子街道(90)	
お知らせ・編集後記・三河アララギ規定	

山口千恵子	(29)
夏目 勝弘	(30)
阿部 淑子	(31)
白井 信昭	(31)
いーはとぶ	(32)
	(33)
	(34)
	(35)
植村 公女	(36)
貫名海屋資料館	(36)
山口千恵子	(37)
弓谷 久子	(38)
青木 玉枝	(38)
安藤 和代	(39)
大橋 望彦	(39)
今泉 雅勝	(40)
今泉 一石	(42)
鮫島 満	(44)
山本紀久雄	(46)
佐藤 喜仙	(48)
夏目 勝弘	(50)
岡本八千代	(51)
今泉 由利	(52)
平松 温子	(54)
	(55)
	(56)

## 感 銘 歌

御津磯夫第十歌集 「御津磯夫歌集」

東京も名古屋も大雪ふりてをりその中間の御津は春雨

P  
95

かく早き投稿何ぞと罵<sup>ののし</sup>りつつ朱を入れて楽し春さだまりぬ

P  
98

歌集 「スモン」

大須賀寿恵

臥床より見えぬ電線の大きく揺れ鳶かとも思ふしばらくのあひだ

穂にいでしひつじの稲の素枯れつつゆれつつ冬田凍りゆくべし

下半身に萎え感じつつスモン病み夜毎二つのアンカを抱く

## 春の雪

蒲郡 岡本八千代

二月の逃げ去るごとく過ぎにつつけふは静かに春の雪ふる  
にんがっ

幾年ぶりかわが町西浦にも春の雪雪はいつしか氷雨になりつつ

わが諍いさかひはやもうすれて春の雪黙々としてたゞに降りけり

集ひたるこの図書室の広き窓に雪はみぞれに降りつつが見ゆ

傘さして氷雨ふる中出でむとす何も用なく君に会ひたく

居酒屋に今宵休業の貼紙あり扉開けたらば君らがあるる

頼もしき中年男女をのこをみなとなり吾をも待ちをりこの居酒屋に

海にほふ熱々あつメヒカリハダカとふ焼魚がわが目の前の皿に

一口の「空」といふ酒に頬火照ほてり久々に陽気になりたりわれは

時々は渚の音に気づきつつかつての生徒らと居酒屋の夜

# 神 様

東京 今泉 由利

薦被りとワイン樽との真中にて参道をゆく神宮詣

樟と樟とに注連縄のかかりてゐたり神様の庭

脇息に寄りて思案のさまに見ゆ柿本人麿像に会ふ

日本語三十一文字のリズムして昔の人の親しく覚ゆ

少しばかり時の過ぎたることわりに美しき文字読み得ぬを知る

束帯に笏を持たるる内裏様和歌推考をされゐる様子

研究の進みきたれる理に羽毛恐竜獣毛恐竜

カルシウム豊かに含める土壌ならむ逞しい骨恐竜化石

十二粒の朱実万両消えにけりヒヨドリ来たり私のベランダ

下手といふ上手といふことは無い伝ひきたれる心尊ぶ

## 去年と変わらず

豊川 弓谷 久子

声はりて豆まき給ひし静誠様を憶ひ出しをり今宵節分

コリコリと音立て嘯めば福豆の昔乍らの香の広ごりぬ

いそいそと連れだち行きき国府市の甘酒の味田楽の味

鬼祭りとしてたんきり飴の届きたり氏子でありし夫に供ふる

人見知り激しき子なりき我が中にみさと幼なしはや大学生か

今頃は試験場へと急ぎてをらむ風吹き荒ぶな雪よ積るな

試行錯誤繰り返へしつつ新しきミシンに馴染まぬ我が手もどかし

手始めに子の服縫はむ習ふより慣れろと今朝もミシンに向ふ

白梅は咲き初めるたり月一度内科医へと行く我が道の辺に

草むらに水仙匂ふその花を摘みつつ帰る去年と変わらず



## 感謝の祈り

新城 青木玉枝

はね上る馬の字見つめもう一度若さがほしい馬の元気が

新しき年の明けゆく大空にまず手を合わせつつ感謝の祈りを

枯原に朝日のさして霜柱玉露光りてとけゆく朝を

辻に立つ石の地蔵さん前だれも赤新しく朝陽に映えて

如月のカレンダー見つつ北風も間もなくやさしき春風を待つ

山里に住みて二度目の冬迎ふ寒さは格別大雪はなし

霜柱踏みて散歩の足許に赤き椿の一花落ちる

寒椿雪椿紅梅白梅と指折りて見る春告鳥も

軒下の巣箱も春を待ちている去りし燕つばめの帰り来る日を

窓越しに今朝はきれいな小鳥二羽仲良く枯原歩みをり

## 一枚の写真

豊川 内藤 志げ

還暦とダイヤモンド婚と八十歳と家族五人を一枚の写真

ウマブドウ焼酎漬を自己流に肺の病に効くかもしれぬと

倒れ伏す竹を跨ぎ又潜り藪の坂下<sup>お</sup>り日向への径

下りゆく落葉の径にこん盛りと土黒々の土竜の塚が

為京の藪沿の径を一廻り今日は無理なく歩み終へたり

歩み終へ少し休みてヤツケ脱ぎラジオ体操の真似ごとをする

申告の少数点の計算を今宵穂の香に教はりてをり

トンネルのビニール張るは夫と嫁われはうろうろテープの支度

お雛様座敷の机に十五人二月の風にと今日は大安

白ざれの裏の畑の廣き中ビニール袋がころころと舞ふ

## 春を待つ

岡崎 林 伊 佐 子

庭すみに藁囲ひして春を待つ牡丹の二種に蕾ふくらむ  
ふる里より移植したる牡丹二種四十年の命を保つ  
庭木々も白一色に変身すきさらぎの雪朝日にかがやく  
雪の日に餌をさがしに軒にくる雀に夫はパン屑をまく  
もちの木に餌台作りひよどりにりんご刻みて夫飼育する  
春耕に付かず離れず鷓一羽われの気付かぬ地虫を拾ふ  
歌舞伎雛わが家の家宝となりて継ぐ明治より三代顔色たがふ  
土匂ふ野良の仕事に日々は暮れ自給自足の料理たのしむ  
賑はひし昔の村落の面影もなくて寂しき帰省する時  
風立てば山のはざまに巻きあぐる花粉の命は人を病ましむ

吉祥山

豊川 安藤和代

忘れいし嫁の記憶を美しく甦らせて香る水仙

強く生きよが口癖なりし父よ今私は強く生きております

降る雨の静けき庭に山茶花のほぐれる様に地を染めてゆく

冬空の真青に澄めるを窓に見て飲むコーヒーのまことに旨し

仁王門くぐる一瞬全身に広がりてゆくこの緊張感

枯れ野中一両電車ゆるりゆく乗ればその先祖母の故郷

裸木に殻の蜂の巣破れいて生きゆくものの厳しさを見る

竹林の風のざわめきも吾が心弾みてをれば喜びと聞く

朝夕に仰ぎてをりぬ吉祥山裏手に夫の生れし村あり

下水道工事の進む吾が村も土の香消えて町となりゆく

## 二月の光

東京 佐藤喜仙

落葉松の落葉黄金の針となり寒気の中にキラキラ光る

冬の夜は部屋にこもりて本読むも暖房の熱気でいつもうたたね

電氣化の進みし街の平屋より足踏みミシン昭和の音する

新聞を読む人のなき朝の車中いともたくみにスマホあやつる

武蔵野に赤城風が吹きすさび遊ぶ子供等呼ばれて帰る

紅葉山裾から赤くそそり立ちとけこんでゆく群青の空

無花果は買へばけつこう高値だが庭の無花果食みし日々

白梅に紅梅重なる梅の山数多の人の瞳に映ゆる

雪国ではたいした事なき雪の嵩東京の街麻痺すんぜんに

心做し常緑の木々の葉の色が生き生きと見ゆ二月の光

## 何が常識

大阪 伊藤忠男

体内の細胞初期化不老不死夢は夢でも神の世界の

ダーウインの常識やつと解き明かすその日近しと思ふは夢か

いつの世も答え自然の中にあり心澄まして聴くやその声

恒例のことと言われて納得す我も気づかぬ事なかれ主義

発車する列車の時刻狂いなし一分遅れ大騒ぎする

約束の時刻約束なりとても郷には郷に従うべきや

暖かさ馴染む身体に氷り雨慌て襟立て歩く路地裏

出かけるに携帯スイカカードさえあればこと足り東京の町

常識と言われ常識何なのか理屈とおらぬ決まりごとかも

春告げる百舌鳥の鳴き声聞きながら雪道歩く原谷の里

## 「ありがとうね」

蒲郡 遠 藤 脩 子

「ありがとうね」と優しく言ひて微笑みてリハビリ室を出でゆく姫

山の神を田の神を背負ひ子供らが雪道を辿る足跡深し

苦が去る難を転ずと縁起物を古稀過ぎて得し友より賜はる

窓鳴らし風吹き過ぐる夜の更けに何かカラカラ転がる遠くで

いつの間にか肩怒らせて過しむしか夜更けの風呂にほうと荷おろす

米寿記念の絵画展なりクロッキーの自画像仰ぐ眼光鋭し

残光に川面きらめく流れのほとり青き服纏ふ女人ひとり

我はこの川面輝くこの絵が好きブランディワイン川三十年前の作とふ

今はもうこの色は出せぬと傍らの同朋に語りぬ腕組みながら

原稿の約束ごとにも戸惑ひぬあまりにも長き欠詠の日々

## 土肥桜

沼津 鈴木孝雄

土肥桜見たく訪ねし万福寺濃い桜花に境内は春

風避けて獅子浜脇を散歩する河津桜が一輪咲けり

樹の下に落ちた椿の赤い花いよいよ季節の動き出しけり

立春に海鷗が島に戻り来たまるで暦を知るがごとし

暖かな沼津の地にも雪が舞う桜の花まで行きつ戻りつ

舟揚場鳥が仲良く藻をつつく白いカモメと黒いカラスと

雪の後厳しい姿の富士山が夕には優しい春の顔に

昨日まで無かったはずの水菜の花春の日差しに一斉芽出す

ジャガイモの後のナス科は駄目なのだ連作障害避くは難し

海岸の空をカモメが乱れ飛ぶすは地震かとスマホ取り出す



## 残のこんの雪

東京 足立 晴代

梅古木積りし雪も溶けゆきて小枝に赤き蕾ついたり

古き雛飾りて忍ぶ吾が父母の愛しき孫に求め来たれり

色褪かんばせて顔白かわゆく可愛かわゆげに笑ある雛に見入る吾なり

桃の花可愛い色に幼児の男雛女雛に語りかけたり

住みなれし家離るゝはつられど夢叶えんと望み持ちて

歳重まんね満かぞと数えで過し来たかわ変わる年号忙しきかな

銀世界埋うもれし樹々は如何ばかり晴れる日待ちて頭こうべたれしと

残のこんの雪その上へに重かさなる新雪しんせつの深々となるを吾は見るのみ

健けなげなる心を持ちて五輪えの厳きびしき道を歩み来ませり

雪の花風情ふせいひとしお降りしきる深き雪道人影もなく

木挽町こびき

東京 森岡陽子

木挽町老舗こびきちようのシチューに舌鼓こぶ続いて老舗こびのしるこにニッコリ

細波こまなみがきらきら光る古ふるき池いけおしどり鴨鴨と賑にぎやかなりし

新あたらしき葉はの間に間にすずめ達たち春はるも近ちかしと鳴なき交まじりいる

古いにしえを忍しのぶ名園な緋ひもうせん一服いちぷくの抹茶ま茶ち白梅はくばいの菓子かし

正五九せいごの成田なりた参まりの帰かえり道みち何時なんじもの鰻屋うなぎや暖簾あたたかたたむ

寒月ふゆづきの輝あかりく芝居しばいの帰かえり道みち芸妓げいぎの悲恋かなこ明治めいじは遠とほし

車窓くるまどより眺ながめし富士ふじの雪ゆきすがた何時なんじかつけたい登山とんざんの靴跡くつあと

春はるの日に静しずかに降ふりし淡雪あは雪ゆきは梅うめのつぼみにそつと積たかりて

友愛ともめでし美うしき娘むすめの名なはさくら花はな満みつ時に舞まい散ちり逝しきぬ

月明つきあかりりかえ紙かみに書かかれし忍しのぶ和歌わが歌人かの思おもい深こく切きな

## 鎌倉

東京 小柳千美子

音に聞く安産祈願の段葛今に残りて古語る

天皇の野立の山と仰ぎ見る深き緑に風のそよぎて

走り根の古道下れば由比ヶ浜虚子と立子の佇む如し

空高く春の雁越ゆひたすらにただひたすらに鎌倉山を

夕日差す浜に鴉の群れてをり漂ひ来たる藻屑啄む

由比ヶ浜寄せ来る波の忘れもの小貝拾はむ旅の土産に

筆跡も美し和歌の屏風あり今宵の宿の粋なもてなし

海見ゆる窓辺に寄れば鳶の声空を巡りて何か嘆かむ

朝まだきほどろほどろに沫雪の沖をかすませ木々を飾れる

雪繞く駅のホームに列車待つ旅の終りを真白く結ぶ

## 以心伝心

豊橋 胃 甲 節 子

雪柳の芽が一ミリの緑の芽整然として咲く日待ちをり

数年に一度の寒波とゆふ朝も予約のタクシー正確に来る

寒くても雪降らなくて良いですネ運転手さん会話楽しく

もう半月故郷の妹より電話無し寒さと痛みに苦しみるまさむ

早々と此の寒さにも露の臺二つ並びて芽生へし嬉しさ

病院の予約日終り今日七日ソチオリンピック今日より始まる

以心伝心友の手紙と入れ違ふ友は厳しき現実知らせ来

晴れ渡る空の高みに少しだけ飛行雲引く飛行機がゆく

クリスマスローズの花ひとつ咲きたる朝は寒き寒き朝

クリンコザクラ紅に真白き縁取りの戴きたる花今日咲きました

## 拍手

春日井 清澤 範子

婿も無し孫も無くして吾が夫は三人みたりの暮し大切にしてくれぬ

喘息に吾伏しをりて今年の玄関に葉ぼたん植ゑざりしまま

来客の応待娘にまかせゐて吾抗生剤飲んで伏しをり

寒気の中雪積りある神社に詣で拍手打つ手の冷たかりけり

惚けぬやふ若く居るやう母さんは歌を詠み続けることと娘は

安定剤のみつつ勤め果すなり娘の好物思ひて献立

今日晴れて来客のあり増築の武者隠し付く室に赤きじゅうたん

立春の夜のとばりは静かなり東の空に煌煌の月

オリンピックに日々感動せり家計簿に競技のメダルを書き込みてゆく

庭にある赤白混じりの椿花雪どけ待ちて大輪開く

## 雪 像

東京 富岡和子

電車にて盗み見たのしあちらこち携帯スマホ持たぬ生活

朝風呂の時を忘れる湯舟うち似てると感ずこは羊水か

細きこと堂々巡り春近くポーンポーンと音の増しゆく

真向きに佗助<sup>わびすけ</sup>ピンク足止まるかの日朧げ新たな道の

早い朝赤い椿に目白二羽揃って蜜を飛び立つ同時

揺らいでる貝母<sup>ばいも</sup>の芽吹きまらく見ゆ大雪抜けて蓄を守る

賑々し一方通行守られて老若男女雪像見上ぐ

零下九度樹氷見渡す溪流をキラキラ眩し旅終える日の

桃節句女子会開く喜寿<sup>なかつま</sup>級友料理名人美味持ち来たり

内裏雛三人官女<sup>はやし</sup>囃子びな定位置忘れワイワイ楽し

## 駅弁

豊橋 伊与田広子

アバドの追悼演奏テレビに見る死一年半前のレクイエム

アバド指揮モーツアルトのレクイエム死の予感ありしと思ふなり

ベルリンフィルチャイコフスキーの第五番アバド音楽監督時代

岩合の世界猫歩き沖繩に潮引きたれば猫遊びをり

今朝からは急に暖かくなりたるに膝の痛みもなく歩くなり

歩きたれば膝の痛みも時々歩きつゞけば忘るるかとも

鱒のすし五十年前土産にと富山の方から頂きしこと

母居しに喜び二人で食はみたりき思ひ出深きは楽しみなりき

見つけたりカニウニイクラ入りたるを海宝三色ちらしとありたり

昼ひるばん晩と駅弁買って帰るなり足の痛みも忘れ下り坂

## キラン草

新城 半田うめ子

野田の刑事の来て吾の室のぞきて居り平成元年

わが友の永眠したりき鈴木様知らずに居りて淋しかりけり

ころびたり自転車にて見る人の五十人以上笑みをうかべて

庭中に咲きてゐるなりキラン草紫の花しばらく眺む

キラン草の花咲きてをり眺めつつ友と語りつつ松風公園

浜松の金山寺味噌味のよく時々頂くやさしき孫より

万両の赤き実みの多くして楽しみて眺むる前畑なり

庭中にクリスマスホーリー二鉢ありやさしき孫のもちて来たりし

梅鉢草咲きて居りたり石雲寺星川先生と眺めたりにき



## 如月

名古屋 近藤映子

八階にシャコバシャボテン花開く。ピンクの花明るし。明るし。

わが夫の発熱下ればホットしてテレビ付け共に初場所を見る

わが夫の落ち着きたる顔見れば正月も末と話して足さずする

わが夫のテレビ相撲に釘付けの目ざし少し私に分けてよ

わが夫は発熱すれば又転院す大病院は家より遠し

風邪ぎみの吾は我夫の見舞ひも出来ず内科に通ふ

立春を過ぎての寒波身に沁みぬ夫の発熱に眠れもせず

わが夫のまた転院十四度目その度発熱する余命の危うし

如月の何年ぶりの雪積る八階の窓の白景色

ああああ寂し夫見舞ふ時ついに無くなりてしまぬ

## 喜怒哀楽

蒲郡 杉浦恵美子

先生と呼ばれずなりて三年過ぐこの気楽さよこの気儘さよ  
先生とこの身呼ばるることよりも我が先生と呼ぶ方が好き  
考へてみればひねもす淋しかり喜怒哀楽の哀が勝れり  
この三年寒色ばかり着て居しが今日突然に黄色が着たい  
立春をせめて寿ぐ我が夕餉海老と菜の花一人分なれど  
八畳の居間を一步も出でずして半日暮せり春未だ遠し  
何処へも出掛けなくとも事も無く今日も一日過ぎて仕舞へり  
申告の寡婦控除の語厳めしく我が感傷など吹き飛びにけり  
事務処理が大の苦手のわたしにも夫よ今年も申告済みぬ  
美術館も動物園も未だ開かぬ上野公園ひたすら歩く

## 明けの明星

豊川 平松 裕子

我が峽を出でて出会ひぬ東ひむがしの空の低きに明けの明星

漆黒の闇の中にて海も空も分かたぬ空くうに光る金星

いきなりに明けの明星を見失ふ闇の中にも雲はあるらし

須弥壇の下に潜りて涅槃図を取り出してをり明日は涅槃会

無住寺の寺役となりしこの一年今日は涅槃図の有り処ど確かむ

吾が掛けし涅槃図の前にしばし坐る最下に猫の描かれてをり

掛け終へし涅槃図の前に木魚と経卓を据へひとり経読む

ゆらゆらと光の帯は遙か遙か太平洋の水平線まで

日は西に傾きてをり海の上をきらめき渡る光の帯は

炭に近く炭に触れずに香を置くされどたちまち香りたちくる

## ひむがしの

豊川 小野可南子

東に明けの明星輝やけり並びてCの形の月よ

細々とCの形の月の光かけ寄り添ひ並ぶ明けの明星

東の低きにありて細き月二十九日のこの赤き月

ひむがしの二つのひかりにほのぼのと今日をはじめむ良き日とならむ

まっ白のレースと紛ふは蜘蛛の巣あしたか朝の霧の粒子をまとふ

張られたる蜘蛛の巣高し今朝の霧の水滴おびてレースと紛ふ

カーテンの細き隙間のしらじらと我の目覚めの早くなりつつ

一夜さを我を温めし湯湯ゆたんぼ婆を胸にいだきて起き出でにけり

紅葉こうざいたい苔その蕾菜の茹で汁は紫に澄む尊ときほほどに

鉢植ゑの椿の根元に差し置きぬ白き名札に「万葉椿」

## 絵はがき

豊川 山口千恵子

水仙の花咲く脇の貝母百合いつしか芽吹く濃き紫に

鬱々とすごしつづきて如月も半ばとなれば貝母は芽吹く

左ならまあ良かったねと言はれつつ手首骨折に苦しみてをり

粉ふける左手首をさすりをり皮膚かさかさのギブスのあとは

水甕の水飲みゆけりいつもの猫朝日に光る如月の水

一群の水仙の花ふるはせて少し春めく如月の風

青々と生ふるハコベを掻きとりぬ赤く芽吹ける牡丹の根方

ヨーロッパを貧乏旅行してゐますと桃子より届くモナーリザの絵はがき

絵はがきはルーブル美術館で買ひました祖母忘れずにたより寄こしぬ

かぜひかぬやうにとやさしい言葉レンブラント「夜警」の絵はがきには

紅くれないの箸

豊川 夏目勝弘

切り倒しし紅梅の幹を持ち帰り二年の日月の早やすぎにけり

紅の色を保てる太幹を割りて作らむ紅の箸を

3Dのプリンターの逆をすればこの材質にて箸が作れる

紅の色こそよけれ作りたる箸もて長き命つながむ

紅の箸を箸もて打ちてみるカンカンと冷気にひびく

整えし寺のみ庭に三たびの春蕾のまろみに紅梅の色

紅梅の咲く月たちぬ紅の色を充分蓄へし幹

この庭の同じ土より紅のまた純白の花咲く不思議

紅の色の見え初む一枝をみ庭の地蔵に捧げて帰る

大雪のニュースを見て机にもどる香の煙のゆらぎを楽しむ

## 夜の明けるまで

横浜 阿部 淑子

ソチ五輪夜の明けるまで画面前選手の鼓動いつしか我に

ジャンプするその度ごとに手を合わせ我れの心は選手と共に

四年もの歳月をかけ鍛え来てミス許されぬメダルの重みぞ

雪止まず一夜明ければ銀世界「家においてね」と娘は長靴

大雪の積りし道も雪かきの心交えば往く手平に

## 姫塚

豊川 白井 信昭

冬至よりひと月余り庭中のカーポートにも日差し増しきぬ

見まわりの線路近く姫塚の小さき祠に歩みを止める

あの角を曲がれば見える黄梅の芽ぶきてゐるか今日の日こそは

昼中を吹き荒れし風の静まりて今宵東に淡き満月

『いよよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

ふすま取り十四畳に布団敷き合宿さながらうから集ひぬ  
孫六人騒ぎの後にいつしかに眠りたるらし静かになりたり

牧原規恵

産休明けの名古屋の娘よりこの更け夜「なんとかやれそう」の弾める電話

西浦駅に夜九時着の電車より降りたればかすか眉月のあかり

稲吉友江

玄関の千両の朱実こぼれをりもはや今年も二週間の過ぐ  
醍醐寺に冬の日ざしのさしてくる勤め了へたる夫と私に

鈴木美耶子

降りしきる白き粉雪眺めつつホテルの今朝のブレックファースト  
雪降るに傘を持たずに出掛けたり紺のマフラー真知子巻にして

吉見幸子

わが町の倉舞港の北空に宇宙船「きぼう」の光りを待ちをり

友に聞き娘に聞きて出来上りし苦味ほろほろのわがレモンジャム

牧原正枝



娘からのま赤きセーターを今年こそ正月に着て彼らを待ちをり

正月に騒ぎてさつと帰りゆきぬ子らよ孫らよこのままもよろしか

チツチツケキヨと雑木林の木の間まより聞こえてくるかな小寒の朝

道の辺にカラカラ乾きし音のするペットボトルの風車かざ廻る

正月に蒲郡文学館にて「時手紙」記して祈りぬ十年先を

子の産まるる兆しのありし一報にその父発ちゆく吾も安産祈りつつ

木の実落ち落葉散りしく愛宕山の石段ふみしめ登るわが足音

銀色に光る海に浮く西浦の松島の先端に神おはすらし

庭先の白梅の蕾ふふみきて植ゑにし君を今日も憶へり

つひにつひに独り身となりしをみなわれ今宵も誦す写経の一卷

風邪気味の母の蒲団に湯たんぽをそつとしのばす師走の更け夜

母親の「いつ食べるの」に「今でしょ」と応えし孫は慌て食べはじめ

岩瀬 信子

石田 文子

森 厚子

山崎 俊子

三田美奈子

水野 絹子

『かさね』の一句 三月号

花のなき花壇に咲ける霜柱

佐藤喜仙

初景色変り映えせぬ山なれど

松本周二

薄氷を胸で押しゆく湖の鳥

古川千鶴

松とれて戻り始める街の音

山元正規

郡上染め洗ひ仕舞や寒の入り

川井素山

正月や思ひたつての墓参り

田島昭久

遠富士を逆さに拝む梯子乗り

小池清司

道を行く靴音ひとつ寒に入る

米田文彦

オペラグラスに役者をとらふ初芝居

長久保郁子

最上川下る二艘の炬燵舟

青木英林

今年こそ検診受けよう七種粥

岡野安雅

暗闇に耳をすませて雪をきく

凍て星の遠きに憶ふわが故郷

賑やかに親子三代歌留多とる

鳴き声も変りて朝の初雀

雪晴れて森羅万象煌めけり

静かなるビルの隙間の初日の出

岬までバスに揺られて野水仙

幾筋も冬田の煙雲に和す

年忘れ一年一度の無礼講

元日は誰れ彼れなしと頭下ぐ

氏神の社の杜の淑気かな

庭隅に小鳥来てをり初日の出

山本草風

池内とほる

小柳千美子

森岡陽子

丸山酔宵子

田中清秀

柳田皓一

和田勝信

橋本修平

後藤克彦

吉田博行

長島清山

『俳句』

一抜け二抜けひとりとなりし冬たんぽぽ

植村公女

流水の波の形に流れをり

豆腐屋の喇叭追いかけて冬茜

若き日の愚かさ恥じて土筆摘む

一石

芽起こしの雨と謂ふからなほ愉し

生命のこぼれるやふな季節ときにあり

## 「歴代天皇御製歌」(二十三)

賈名海屋資料館

『嵯峨天皇』第五十二代・在位八〇七年(二十四歳)―八二三年(三十八歳)

嵯峨天皇は、桓武天皇の第二皇子であり、平城天皇の弟君にあたる。嵯峨天皇の治世の始め、平城天皇が復位を試みた「薬子の変」が発生したが、後、平安初期における文化の隆盛をむかえ、平安京が都として定まった。

「日本後記」が編まれ、「凌雲集」に漢詩を残され、「類聚国史」に和歌を。箏、笛、和琴も巧みであられた。空海の最大の庇護者であり、橘逸勢と書の三筆と知られる。

八一六年には、空海が高野山に金剛峯寺を創建している。

宮人の其の香に愛づるふぢばかま君のおほ物手折りたる今日

皇太弟(後の淳和天皇)が文人に命じた和歌に和して嵯峨天皇がうたわれた歌

時<sup>ほととぎす</sup>鳥鳴く声聞けば歌主とともに千代にと我も聞きたり

(日本逸史)

## 私の一首

一つ家毀たれしあと広くして見なれし街の景色の変はる

山口千恵子

何ごともない、いつも見なれた日常の風景が、一軒の家が無くなることで、こんなにも変化するのかと不思議に思いました。

いつも通る道の様子がなにか違う。庭木の繁った家がこわされて更地が変わっていた。

普段何気なく見ていた景色が見知らぬ街に見えてしまう。何かを変えることにより、マンネリ化から抜け出せることにも通じるのかと思った。

こめと言ふ名の母なりき雪柳をこめ花と呼びてこよなく愛でき

弓谷久子

「コメといふ君が母上の名の花よつづつぶ真白我が雪柳」岡本八千代先生が、二十五年四月十八日三河アララギ六十周年記念歌会に出詠された御歌です。十年前蒲郡俊成歌会に今は亡き春日井健先生より選者賞を戴いた私の歌の母の名を憶えていて下さったのが嬉しくて感謝致しました。選評者として出席して見えた八千代先生の壇上での面影と共に私にとって忘れ難い歌となり自分の歌と共に心に残ります。

あの山を越ゆれば故里三河湾海の匂ひがあの砂浜が

青木玉枝

蒲郡を去つて五年余、伊丹作手と歳月は終を迎える私には反省と故里への思い、何故八十年も住んだ土地を離れたのか悔と涙の日び、今更悔いてもせん方もなく何故何故と自分を責めて区画整理とは言え私の家だけ空地となつて、続く家並は一軒もこわされて居ない。私の家だけ何故市役所にも文句を言いましたが職員は定年退職、蒲郡市中をタクシーにてゆつくり廻つてなつかしい竹島海岸海の匂いを胸に山里に帰りました。朝夕山並の向うに故里の海があるこの思いの一首です。

亡き母の浴衣解きをりほろほろと思ひ出遠く山鳩の啼く

安藤和代

母が逝つて四十年思えば長い年月である。母の思い出の品も消えつつある中、百合の花柄の浴衣が一枚大切にしまつてある。百合の花を好んだ母に私が縫つた浴衣だ。病院からの外泊の時嬉しそうに着ていた母が思い出される。いずれ始末されるであろうから何か形にとどめたくて解いてみた。糸を切るたび母の笑顔が浮んだ、母の声が聞こえた。糸を切る手が時々止まった。涙があふれた。母が恋しい。母に会いたい。私の気持を知る様に遠く山鳩が啼いていた。

## ある自然科学者の手記 (23) 大橋望彦

### 「生きている科学」②

障害や疾病で痛んだり、失ってしまった器官や組織を復元させることを試みている再生医療の研究者たちは、どんなタイプの細胞にも発育できる、このような多能な幹細胞を得ることに、高い期待を寄せながら待ち望んでいたのだ。そのような目的に適う、最初に発見された胎児由来の幹細胞 (ES細胞) は、受精卵を破壊することが必要で、倫理的な問題を生じた。次に見付かった画期的方法は、これでノーベル賞を受賞した山中伸弥京都大学教授が名付けた iPS 細胞 (induced Pluripotent Stem cells: 誘導された多能幹細胞) で、是は受精卵を用いることなしに創ることが出来た。しかし、この方法では、細胞に外部から数個の遺伝子を導入するという過程があり、これが同時に「がん」を誘発させる可能性もあるという局面に立ち至ってしまった。STAP細胞は三番目に作り出された方法で、これらの細胞は身体にある体細胞

を培養して、酸性液に曝すと言う簡単な事しかしないで創り出し、胎児を損傷するとか、遺伝子操作をすると言うこともせずに創られ、出来た組織では何も染色体に異常は見つからなかった(癌化することが極めて低いことを示している)。

論文の共著者の一人である理化学研究所発生・再生科学総合研究センターの副センター長笹井芳樹博士は、当初「こんな事は本当にあるのだろうか」と躊躇<sup>ためら</sup>っていた。英国の科学誌 Nature<sup>レプ</sup> の査読者も明らかに同様な疑問を持っていたのだ。それは、植物の細胞では、環境の変化に反応して、未分化の状態に戻ってしまうと言う事が知られてはいたが、しかし、動物細胞は、今回のように酸性の液のような強烈な環境で、未分化な状態に変わって生き延びるようなことは、不可能、であると考えられていたからである。

論文の筆頭著者である、理研センターの小保方晴子博士は論文を「Nature」に投稿したが、査読で返されてしまった。そこで、その疑問に答えるべく、更に9ヶ月の間に、出来た細胞組織のビーティング(あるリズムを持つて細



胞・組織が伸縮する運動)を動画に写し出し、更に、遺伝子解析を行ない、結果的に論文は採択された。

もしも、将来、科学者たちがヒトの細胞を用いて同じような結果を得ることが出来れば、このSTAP法は疾病の研究や再生療法に有望な道を開くことになる。笹井博士は付け加える。「iPS細胞でやって出来るものはSTAP細胞でやれないことは何もない」・・・と。

論文では更に、酸性液が細胞にストレスを引き起こすことによって若返りさせたとも述べている。細胞の若返りを引き起こすのは、是だけでなく、もつと多くの原因があるかもしれない。例えば、加圧とか、ある種の毒性物質とかの異なったタイプのストレスに対し、生き延びた後の彼ら細胞の性質が変化してしまうことは、既に知られているからである。もしも、科学者が細胞の性質を変える技術を更に詳細に調べたならば、彼等は医療として細胞にストレスを与えることを行なうて、患者の身体の内部で損傷した部分を復元させる可能性も考えられるのである。

小保方博士はこの研究が進んで早い時期に、この技術

が適用されるようになるということは疑っている。即ち、未だ是は、マウスを用いて試みた結果だけであるからだと言っている。しかし、一方で、彼女はまた、新しい可能性に関して、癌の研究に利用するようなことの希望はあると述べてもいる。

以上が是までに報道されている事柄であるが、是だけでも手に汗の出るような快挙であると評価したい。最も眼を見張ることは、実に簡単な技術により、誰も予想も出来なかつた事実を発見し、しかも、自然界にそのような条件は何処にでもあることが、誰も知らなかつたことである。そして、結果的には、今迄の科学の常識なるものを全く覆ってしまうような発見となっているのである。これこそ、最初に述べた、『科学は生きている』ので、複雑なのだが、真実を見究める心で、云い換えれば、常識に囚われる事無く真摯に探求することで、結果を生み出すこととなっている。日本の科学者は、まだまだ捨てたものではないなあ。発想に乏しい、などと失礼なことを言ってしまう、反省仕切りの態である。

## 絹の話 (41)

「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

### 絹と伊勢神宮

#### 【絹の奉納】

伊勢神宮(内宮)には毎年、神に捧げる衣服「神御衣(かみみそ) いわゆる御衣(おんぞ) が三河から奉納されています。

それは遠州織物の発祥地、浜松の三ヶ日岡本の初生衣(うぶぎぬ) 神社亦浜名斎宮より、東三河の各地(高山、牛川、豊橋、田原、伊良湖) で神事を繰り返しながら伊良湖から船で鳥羽を経て伊勢神宮に運ばれていた様ですが、近年、道中はかなり省略されて来ているようです。

前年秋、神社にほど近い濱名総社に納められた白い絹布「御衣」を唐櫃に納めて持ち帰り、奉献の神事が(例年4月第2土曜日)伊勢の内宮(皇大神宮)の祭神、天照大神への「太一御用」「おんぞ奉献」の旗織を立てて肅々として行われ、祭祇を終えた御衣は坂本峠を超えて豊橋の湊明神に納められて、5月に改めて湊明神で「おんぞ祭り」が営まれているそうです。日時が前後してよく判りませんが、田原伊良湖町の伊良湖神社でも4月第3日曜日に「おんぞまつり」が賑やかに行われています。

初生衣神社は天棚機姫(あまのたなばたひめ)の神を

祭り、天照大神が天岩戸に隠れた大神に献納する和妙(にぎたえ・絹織物)を織ったとされています。

宮司は神服織(服部)と称し、神代より神御衣と妖化(ようけ)守護の家柄(従五位の下)で、古文書によると、山城国から遠江国浜名岡本に田(位田)を賜り、移り住み、三河の赤引きの糸を使って神御衣を織った、と養老律令の注釈書「令義解」に記されています。現在は国産の羽二重を調達しているようです。

また、田原市亀山町の神宮神御衣御料所では6月に新城で出来た繭を使い「繰り糸始め」の儀式を行い、赤引きの糸として7月に「お糸船」を伊良湖から送り出しています。

#### 【赤引きの糸】

この糸がどんな繭から採れる、どんな糸なのか、なぜその様な名称が付けられたか、よく判りませんが、その産地は2カ所あり、三河の赤日子神社のある赤孫(あかまご)、鳳来町大野の服部。『神服部神社御由緒』によれば「大野ヨリ調進スル赤引キノ糸々青ク光ル」と云う記載があります。

ここで私なりの想像をめぐらすと、その昔この辺りは樗やクヌギの広葉樹が繁る山里でその葉を食べて育つ日本固有の山繭(天蚕・繭が緑色)が採れ、それを古代では一般に紡いで糸にしていたのですが、この地の人はそ

それから生糸を引く先端技術を持っていたと思われれます。それが将に青く光る絹糸ではないでしょうか。

弥生時代には北九州にしかなかった養蚕技術が古墳時代から飛鳥時代にかけて急速に畿内から三河、遠江、武蔵の国々に伝わり、大陸や高麗、百済等から多い時で千人を超す技術を持った渡来人が、大和朝廷のもとにやって来ました。その中には蚕の種、桑、製糸の種々の道具を持参し、紬糸ではなく、繭から1本の糸を引く生糸作りとそれを使って薄絹を織る技術を持った人達がいたに違いありません。大和朝廷は官位制度導入などで増大する絹需要（品、位を授け絹を下賜するなど）を賄う為、絹の調貢を強力に押し進めていました。畿内で技術移転が済むと、田畑や時には官位を与えて地方各地に移封したのです。神服織家は将にその様な家柄ではなかったではないでしょうか。三河には神服織家が移封される以前に無名の渡来人が製糸技術を伝えていて、天蚕繭の生糸が三河赤孫郷で作られ献上されていたと思われれます。今日でも天蚕から糸を引くのは家蚕（一般の白い繭）に比べて非常に難しく、極めて珍品であつたので、特に赤引きの糸と称されたのではないのでしょうか。

そこに官位を持った神服織家が朝廷の勅命を携え、家蚕の最新技術を持って移封されて来たと思われれます。その技術は精練技術にあつたのではないのでしょうか。（米の精米の様に生糸の外側についているセリシンをきれい

に取り除く事により、白く、しなやかで、艶がある糸が出来る）

神服織家は他では見ない艶やかな新しい絹を従来の赤引きの糸として宮中に納め、持統天皇の時代に伊勢神宮にも奉納する様になつたのではないのでしょうか。

延喜式によればこの当時すでに、三河は日本最大の絹産地であつ最高級品、犬頭白糸を作る国だつたのです。

### 【豊川の犬頭神社】

なぜ三河の国の絹糸だけ特に犬頭白糸と言われのらうか。『今昔物語集』によると、三河の国に妻を二人持つ郡司がおり、養蚕をして絹糸を沢山とつていたが、本妻の所の蚕がみな死んでしまつたので、郡司は別の妻の所に行つてしまつた。本妻は一頭残つた蚕を育てていたら、その犬が蚕を食べてしまつて、暫くしたら犬鼻から雪の様に白い艶のある糸が沢山出て来た。

糸を吐き終えた犬は死んだので裏の桑の木の根元に埋めた。郡司はまた本妻の所に戻つた。

この話は先着渡来人による赤孫郷の赤引きの糸と後に移封された神服織家の白い艶の糸の関係を物語るものではないのでしょうか。

## 物理学者と詩歌の世界 (51)

一石

### A・アインシュタイン再訪

A・アインシュタインについてはすでに「物理学者と詩歌の世界(11)」でご紹介した(参考資料1)。最高の知性の一人、アインシュタインは深い思索にうらづけられた含蓄のある言葉を数多く残している。それらはいろいろな文献に分散し引用されている(参考資料2)。ここでは「アインシュタイン再訪」の形をとって彼の世界観を反映した印象深い言葉をいくつかご紹介したい。

- 私は頭が良いわけではない。ただ人よりも長い時間、問題と向き合うようにしているだけである。
- 私には特別の才能があるわけではない。ただ私は、情熱的に好奇心が旺盛なだけだ。
- 狂気。それは、同じ事を繰り返し行い、違う結果を予期すること。
- 間違いを犯した事の無い人というのは、何も新しいことをしていない人のことだ。
- 学校で学んだことを一切忘れてしまった時に、なお残っているもの、それこそ教育だ。
- 知恵とは、学校教育の産物ではなく、これを身につけようとする生涯にわたる試みの産物だ。
- 想像力は、知識よりも大切だ。知識には限界がある。想像力は、世界を包み込む。
- 真理とは何かを言うのはむずかしいが、誤りを認識す

るのは、ときとしたいへんやさしい。  
○人の価値とは、その人が得たものではなく、その人が与えたもので測られる。

○成功した人間になろうとするな。むしろ、価値のある人間になろうとせよ。

○私たちの生き方には二通りしかない。奇跡など全く起こらないかのように生きるか、すべてが奇跡であるかのように生きるかである。

○現実には幻想に過ぎない。非常にしつこいものではあるが、重要なことは、疑問を止めないことである。探究心は、それ自身に存在の意味を持っている。

○子供にも分かる物理的イメージを示せない理論は無用だ。

○主たる神は老獪だが、意地悪じゃない。  
○自分が信じるのは「存在する事物の秩序だった調和のうちに見れるスピノザの神」であって人間の運命や行為に関心をもつ神ではない。

○神はどのようにしてこの世界を創造したのだろうか、私はそれを知りたい。目に見える個々の現象には興味はない。私が知りたいのは神の考えだ。すべてはそれに従っているのだから。

○宗教をともしなわない科学は、びっこである。科学をともしなわない宗教は盲目である。

○私は宗教心の深い不信心者です。……これは、いささか耳新しい種類の宗教ですね。

○純粹数学は、ある意味、論理的概念の詩だ。  
○私は：自然現象を理解する鍵となる概念や法則を、純粹に数学的な解釈だけで発見できると確信している。

経験によって適切な数学的概念が示唆されることはあるかもしれないが、数学的概念が経験から導き出せることは絶対はない。：したがって、ある意味で、私は古代の人々が夢見たように、思考のみで現実が把握できると信じている。

○新しい原理は数学から生み出される。純粋な思考によつて真理を把握できるといふ古代ギリシヤ人の考え方は、ある意味で正しかったといえる。

○われわれに味わえる最も素晴らしい経験は、神秘だ。それは真の芸術と真の科学を生み育てる基本的な感情である。これを知らず、もはや不思議に思うことも驚くこともできない人は、死んだも同然で、その目は曇っている。

○人生の意味を明かしてほしいと手紙を送ってくる多くの人に慰めを与えるという点で、自分は無力だ。

○人間の邪悪な精神を変えるより、プルトニウムの性質を変える方がやさしい。

○第3次世界大戦がどのように戦われることになるかは知らないが、第4次世界大戦がどのように戦われるかは知っている。石ころで、だ。

○原子の力を解き放つたことで、私たちの思考様式を除いてなにもかも変わってしまった。かくして、私たちは前例のない破局に向かってふらふら流れていく。

○道徳は最高に重要なことです。私たちにとつて。神にとつてではなく。

○自然は、我々にライオンの尻尾しか見せない。ライオンは巨大すぎて一度にその姿を見ることができない

からだ。しかしライオンが存在することだけは確かだ。(注：ライオンは、物理学における究極の「統一理論」のこと)

○私は孤独のなかで暮らしている。孤独は若いときにはつらいが、老熟すると甘美になる。

○物理学の世界に生きている我々は、現在、過去、未来の違いが頑迷な悪しき幻想に過ぎないことを知っている。

○世界の永遠の神秘はその理解可能性である。……世界が理解可能である事実は、ひとつの奇跡だ。

○科学者にとつて酬いとは、アンリ・ポアンカレが言う理解する喜びであつて、ある発見が応用につながるかもしれないという可能性ではない。

○物理学の活動を人間の暮らしに應用する現在のやり口は、まちがっているばかりか、非難されてしかるべきものを含んでいると、私は信じる。

### 参考資料

1) 三河アララギ、P36、第57巻、第4号(2010)

2) 『アインシュタイン選集』(共立出版)

ミチオカク『パラレルワールド―11次元の宇宙から超空間へ』(NHK出版) ミチオカク『超空間』(翔泳選書)

アリス・カラプリス『アインシュタインは語る』(大月書店)

短歌に詠まれた茂吉―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

「月虹」 鮫島 満

### 一三 高安国世 2

ゆゑ知らに心いきどほろし年老いし茂吉はつひに孤  
りなりしよ 昭和二十九年 同

み歌読めばわが胸痛し鎮まらぬ心は孤り老いて後に  
も

若き日の生の衝迫に直接す鎮まらぬ老を君なげくと

慄おそへ易き神経を持し老年の暗黒にして対ひたまひき  
かかる老を鎮めむものになだ一つ歌ありき七十年の  
帰結として

「歌集『つきかげ』と題する一連。茂吉の最終歌集『つ  
きかげ』は死去の翌年昭和二十九年二月に刊行された。  
高安はこの歌集に茂吉の孤独、老いてなお失わない生の  
衝迫、茂吉の生涯における歌の意味を読んでいる。

イーザルの縁の水に雨そそぐここに立たしし君と思  
うに

鷗外茂吉リルケこの地に住みしかど過ぎにしものは

昭和三十二年『北極飛行』

かえることなし

心合う友なくここに励みたる茂吉思いて部屋ごもり  
いつ

イーザルの河土手長く歩み来て Forelle blau は味淡  
かりき

高安の歌集『北極飛行』はついに実現したドイツでの  
留学生生活九ヶ月間の作品だけを収める。

作者は「あとがき」に、旅行記は留学中に書いて逐次  
日本の雑誌に発表したが短歌のほとんどは帰国してから  
数ヶ月の間の作であるとした上で、「斎藤茂吉のヨーロッパ  
滞任作品がメモに近いものでありすぎるのを物足らな  
く思っていたが、実際に行ってみるとそれだけでも大変  
なことだということがわかった。ぼくなどはどういふも  
のか、全く作歌の気持が湧かなかった」と述べ、さらに、  
帰国後「もはや時間と空間を距て、なまなましい感動を  
盛ることはむつかしかった」とも書いている。

一、四首目の「イーザル」は茂吉が「イサール」と表  
記してたびたび歌に詠んだ川である。四首目は、イーザ  
ル河畔の店で食べた鱒の味を詠んでいる。茂吉もドナウ  
川の鱒を食べているが、ここでは、「イサールの対岸に  
来て川魚のてんぷら食ひぬ下層の人々の食」(『遍歴』  
と詠んでいる。

#### 一四 土屋テル子

土屋テル子は土屋文明の夫人である。

しばしばも君がいこひし杉森を舟の上よりわれら見  
て過ぐ  
昭和二十三年『槐の花』

作者は最上川を下る舟の上から茂吉の住んだ聴禽書屋の方角、その傍らの杉森を見ているのである。茂吉は「わが眠る家の近くの杉森にふくろふ啼けり春たつらしも」(昭和二十一年『白き山』)のように杉森を詠んでいる。以下、歌の引用はすべて『槐の花』からである。

二階まで雪はつもるといふものを三年をここに過し  
給ひし  
同

この家は二藤部家の離れで、茂吉が聴禽書屋と名づけた建物である。

亡き君を何に偲ばむ蓮華寺のみ寺は荒れて杉古りに  
けり  
昭和二十九年  
ここに於て君がきかしし松風の音ぞ澄むなる真日の  
照る山

近江蓮華寺での歌。ここは、山形金瓶の茂吉生家の隣の宝泉寺住職佐原露応がのちに移った寺である。茂吉は教えを受けた和尚をこの近江の寺に何度も訪ね、「松かぜのおと聞くときはいにしへの聖のごとくわれは寂しむ」(昭和五年『たかはら』)と詠んでいる。

蔵王嶺に白雲湧けばおのづからわれら云ひいづ亡き  
人の上  
昭和三十八年  
最も高きこごしきに君が碑立ついへば駒草平よりふ  
りさきて見る  
この山頂に雪の来る日は君が歌碑雪に立つべしとは  
に孤独に

朝夕仰いで育った蔵王を茂吉は早くより歌に詠み、隨筆に書いてきた。昭和九年、茂吉は上ノ山に住む弟の求めに応じて歌碑のために、「陸奥をふたわけざまに聳えたまふ蔵王の山の雲の中に立つ」と詠み、その五年後には、「歌碑のまへにわれは来りて時のまは言ぞ絶えたるあはれ高山」(『寒雲』)と詠んだ。

## 楽しい時間 17

山本紀久雄

2014年2月28日

今年の2月は雪の当たり年。8日(土)は朝から雪が降り続き、これはダメだなあと思っていると「いーとぴあ」の和田さんから「今日の料理教室は中止します」との電話。

ということとは、和田さんは「いーとぴあ」にいらつという意味になる。帰りの電車が動くかどうか、和田さんが心配になるほどの大雪だが、もう一つ心配事がある。

それは柚子だ。というのも、時折、庭の柚子の木に野鳥が来て啄むのを見ていたので、早く全部採らないとなくなってしまう。そこで「いーとぴあ」でよく一緒の班になる岡本夫妻に差し上げようと、昨日、採って準備していたが大雪、当然に持参できない。

その柚子はどう始末したか。柚子味噌にして、ふるふき大根で食べてしまった。岡本夫妻には来年まで待つてもらい、今年は写真のみのプレゼントとなった次第。

この柚子、パリの三ツ星レストランで大人気と聞いた。発言は



林芳正農林水産大臣。「農林水産業・地域の活力創造に向けて」という真面目な勉強会での講演内容である。

日本の大臣も実務的なことを話すなあと思つて聞いていると、なかなか面白い発想とキーワードで展開した。

その一つがこれからは「6次産業化」だという説明。この「6次産業化」、突然に聞いたので意味が分からない。後で調べてみると産業の1次(農業)、2次(製造業)、3次(サービス業)を掛け合わせた造語である。加工品の製造と販売を通じて農村の所得を増やすことが狙いで、有望事業には資金や計画化や手続きで支援するというもの。

事例として具体的に動いているのが「日本ワイン」である。2013年のワイン国内総出荷量は3260万ケース(1ケース=9リットル)のうち、国産が24%であるが、この24%のうち「日本ワイン」は13%しかない。

ここで不思議に思いませんか? 国産の中に「日本ワイン」が入っていることを。では「日本ワイン」以外はどういうものが国産ワインなのか?

実は、国産ワインの多くは海外原料からつくられているのだ。1986年に日本ワイナリー協会・山梨県ワイン酒造組合・山形県ワイン酒造組合・中信葡萄酒加工協同組合・道産ワイン懇談会の5団体で「国産果実酒の表示に関する基準」の自主基準を作成して、これに基づいて国産ワインの表示をしているが、この基準では「輸入ワインとは外国で醸造されたワインをいい、国内産ワインとは日本国内で醸造されたワインをいう」となっている。



つまり、原料が外国産であっても、日本で発酵・瓶詰すると、国産と表示ができるのである。だから国産24%のうち「日本ワイン」の13%を差し引いた残りの87%は外国産ブドウでつくられたワインなのである。その外国産地は大部分が東欧とアフリカだという。

どうしてこのような奇妙な実態になっているのか。フランスのワイナリーでこの基準の説明をしたら、頭がおかしくなったと笑っていた。要するに世界では通用しない日本ワイン業界の基準だが、その理由を聞けばなるほどとうなずける。

それは日本のワイン用のブドウ生産量が少なすぎるのだ。ワイン用ブドウの価格は、生食ブドウに比較して格段に安いので、農家はワイン原料ブドウの生産を大幅に増やす気にならない。

折角、日本人もワイン好きが増えてきて「いーとぴあ」で辻先生が「ワインを楽しむマナーと料理」を情熱こめて語りかけても、日本のワイン用のブドウ畑が少ないため「日本ワイン」は量が限られているというのが実態。

そこで農林水産省が目をつけたのが全国の耕作放棄地。日本全体で耕作放棄地面積は琵琶湖の6倍の40万ヘクタールもあるという。これを何とかワインブドウ畑にしたいというのが「6次産業化」という作戦。

かつて盛んだった養蚕業のための桑畑や、ミカン畑も耕作放棄地になっているが、こうした中山間地は水はけがよく、ブドウづくりに向いているので、農林水産省も一生懸命奨励

している。

だが、ここでもう一つ大問題がある。それはEUとの通商交渉でワイン関税がかからなくなると、これまた大変な結果が予測される。

現在、EUとでお互いの輸出入品にかけている関税の撤廃・削減をめざして交渉をしているが、フランスやイタリアなどはチーズ（約30%）やワイン（15%か1リットルあたり125円のいずれか）を交渉の目玉としている。この関税が撤廃されると輸入チーズとワインは一気に安くなる。因みに、ワインの輸入額は1100億円程度でフランス、チリ、イタリアの順。

そうすると、どうなるか。農家がワイン用ブドウの生産をする意欲を高めるための価格引き上げはますます難しくなつて、依然として日本のブドウのみでつくる「日本ワイン」シェアは少ない状態で終わるだろう。困ったことだが、すべてを解決する方策はない。

このようなことを考えていたところ、ちょうど岡本夫妻からメールが届いたので紹介したい。

「ふろふき大根、今日みたいな日には、びったりですね。お酒に合いそうですし。うちだったら、ゆず味噌だけで、飲めそうです。ちなみに、うちはおでんです。おでんのかなめ大根は、昨日、畑から抜いてきました。来年は山本さん宅の柚子とうちの大根でマリァージュしたいですね」 来年の柚子採り、ますます楽しい時間になりそうです。 以上。

# 子規の短歌革新とアララギの歌人 (21)

佐藤 喜仙

## (三) 歌よみに与ふる書—第十回—

今月の要旨

① 年長者、元勳崇拜について

② 縁語のこと

③ 言葉の論

④ 新奇なるもの

① 年長者、元勳崇拜について

「先輩崇拜といふことはいづれの社会にも有之候。それも年長者に対して元勳に対し相当の敬礼を尽すの意ならば至当の事なれども、それと同時に、何かは知らずその人の力量技術を崇拜するに至りては愚の至りに御座候」

例えば御歌所というところの歌人の集り、その長ともなれば天下第一の歌よみというように考える者が多いが、御歌所とはいえ良い歌人ばかりが集まるはずもない。歌の世界では今でも単なる老歌人崇拜が多いが、この点を改めないと歌の眞の進歩はない。

② 縁語のこと

縁語とは広辞苑によると「歌文中で、ある言葉との照応により表現効果を増すために使う言葉をいう。例えば「白雪の降りてつもれる山里は住む人さへや思ひ消ゆらむ」の「雪」に対する「消ゆ」の類である」

縁語は多くの場合、歌の趣を損じ、歌の品格を落すので、縁語は心して使わねばならない。

③ 言葉の論

歌を論ずると、中味より言葉の輪が多くなるのは困りものである。例えば「ぼたん」とは言わず「深見草」と詠むのが正当なり、といった論である。しかし現今では「ぼたん」と言った方が実際の牡丹の花の大きく凛とした様子が浮んでくる。勿論古来のしきたりの通りに詠むことも多いが、それはしきたり故に使うのではなく、その方が美感を適切に表現できるからである。

④ 新奇なるもの

新奇なる事を詠めというと、汽車、鉄道など文明の器械を持ち出す人が多いが、それは大いなる料簡違いである。文明の器械の多くは不風流なものであるのも、もしこれを詠むのなら、他に優雅な語句、例えば董とか薄とか配合したものである。菜の花の向こうに汽車が見えるとか、夏草の野末を汽車が走っているとかである。

「いろいろ言ひたきま取り集めて申上候」

「なほ他日詳かに申上ぐる機会も可有之候」

以上 明治三十一年三月四日

## 茅場町また亀井戸(1) 夏目勝弘

針の目のすきまもおかず押浸す  
水恐しく身にしみにけり

左千夫の水害の一首が、それから「水害雑録」と読みかえず。一度現地についてみよう。

まず左千夫の住んでいた、茅場町三丁目十八を探すことにする。

現在の本所三丁目から探すこととし、錦糸町駅の北口を出て少し行くと鉄工所があり、七十歳ぐらいの職人が鉄骨に掛けている。

昔からここに住んでいますかと聞く、そうだと、以前の茅場町はと尋ねる、知らないの即答、その職人の云うには本所に八十年余前からコーヒー店をしている店があるという。

本所一丁目から歩き四丁目まで来てしまったが、ブラジルと云うコーヒー店は見つからない。反対側に行き一丁目に戻ることとする。

なにげなく道隅の立札を見る、松倉米吉の住んでいた跡地である。

松倉米吉はアララギの歌人で、二十三歳で亡くなった。労働歌を発表した歌人でもある。

御津先生に自分の仕事の歌を作れと云はれていたこともあり、米吉のことと聞くと、歌集があるから持ってゆけと云はれ、お借りして写したことがあった。

歩き続けた事も無駄ではなかったと、しばらく行くと戦前の古びた家に「ブラジル」の文字、ここで聞けば分るかと喜

び入る。

八十近いウエートレス二人が椅子に掛けている。茅場町のことを尋ねると、主らしい媪が、父親が生きていれば分ると思うがと。

そのまま帰るわけにもゆかず、ランチを注文し、区役所の電話番号を聞き、携帯をかけ五分余り待たされ、錦糸町駅のすぐ前とのこと、現住所は江東橋三丁目十三とのこと。

なんのことはない、南出口に出れば五十歩と歩まず左千夫の歌碑に会えたものを、本所の街中を二万歩を歩いたことも松倉米吉のことを知ったことでプラスとする。

牛舎は住居と別の亀井戸にあった。現在の亀戸であり横十間川沿いの街、左千夫の墓のある普門院に向う。

普門院も聞かなければならないので、亀戸天満宮にお参りをするに、カメラを持った人の後を付いて行く。

赤い大鳥居の見える通りを行くも、梅の香りが漂ってこない、まだ少し早いうだ。

賽を落し普門院を聞こうと、地元らしい老人に声を高目に二度ほど繰り返すと無言で天満宮の裏手を指さしてくる。

天満宮をバックに写真を映しているグループの裏を通り、境内を横切り露地通りを行き左に曲ったところから寺らしい木立と塀が見えた。

たがわず門前に出た、伊藤左千夫の墓の石柱が建っている。

なんとなく落ち着のなさを感ずる境内であり庭木も手入れがなされず、繁れるまま、左手に墓原が見えた。まず左千夫の墓をに向う。

(以下次号)

## 「氷魚」のことから (159) 岡本八千代

第22回冬季・ソチのオリンピックも終わってしまった。未だ今もフィギアの浅田真央選手のことを思う。SPの16位から、一晚のうちにフリーで6位入賞を果たしたことの何かを。いや、順位ではなく、あれほど落ちこんだはずの彼女が一夜明けて、自分をどうふるい立たせたのかを。その神秘を。

無欲無心になったのか？平生心か？彼女に宿った神の思召おぼしめしなのか？。いずれにしても、弛まざる練習と心との相マツチするところの何かが芸術性として実現できたのかもしれない？。

そんな興奮の心で、子規の「我が病」をしめくりたい。

第四回（続き）。チャンの家で一泊の翌日。

・翌日は、二軍附の人に案内してもらって北門へ往て、小野口某が爆裂弾で破ったという門扉を見たり、城壁の上へ登って見物をした。（往ては方言）

・午後には、同行者つれだつて又大連湾に帰つて、もとの舟に乗った。

・その翌日。船中で、講和が出来たという噂がしきりになった。

・次の日。許を得て我々同業者一同は旅順へ遊びに出かけた。

・房州通いの蒸汽に乗り、大連湾を出ると五時間で旅順へ着く。旅順では今大總督府の船が着いた処であった。

・新聞記者たちの宿所は町の最も高い処にあるので鎮遠を修覆している音などは足もとに聞こえている。

・黄金山の砲台は目の前に聳えている。二三日逗留している間に虎尾、威遠、蠻子營などの砲台を見て、魚雷營を見て集仙茶園劇場に子供芝居を見て帰つて来た。

・大連湾へ帰ると近衛は上陸して金州附近で舎営していたので、その舎営に就いた。

・舎営は、大きなお寺の境内にある小さな汚ない家で、隣室は近衛の管理部である。

・我々の部屋は、幅二間、長さ四間位の広さ。一方に僅かばかりの石牀があつて、あとはみな土間である。石の牀は通訳官六名が寝起する処。新聞記者、画工らの十名ばかりは土間に高黍の稈わらを敷きその上に寝起き。蒲団も何もない。毛布一枚を下と上掛け、十人が十の頭と廿の足を思い思いに伸べたり屈めたりして寝る。

・新聞記者同志の寝てからの会話。（甲、乙、西田、余）

甲「もし講和が出来ていくさが無いときまつたら、君帰るとしようじゃないか」

乙「帰るか」

西山「自分の勝手に帰つては、新聞社に対して善くないから」

余「そのうちきつと、講和のようすが分るから」……と余は宥なだめてみた。

・向うの窓の下では蠟燭一本かすかにもして頻りに原稿を書いている一人がある。

了（明治33年・3稿か）

ことのはスケッチ (424) 今泉 由利

『買名海屋 私注』 ④

買名海屋と時を同じくした江戸中期より幕末、明治…にかけ、書、和歌、画、陶、…京都の文化を造りあげてきた芸術家の交遊を知りたい。

蓮月が幼くして和歌を知ったのは、知恩院山内の住持職の父親の、家庭での聞きおぼえからはじまった。

蓮月は、二度の結婚での五人の子供をはやくに亡くし、病む夫も看護むなく亡くなってしまう。

蓮月は、一八五三年、ペリーの第一回、第二回の来航に、黒船を不吉なものとは見ず、西洋の医術を乗せてくる救済者とみている。世の新しい出来事に敏感に気付く人だった。

○ふりくとも春のあめりかのどかにて世のうるほひにならんとすらん

蓮月は、大変に美しい人で、尼の衣にもうるさく言い寄る相手に対し「前歯を自ら打ち欠きてその相貌を変ぜし」とは、自分で歯を抜き、鮮血は飛び散ったという。

後に、鉄斎は「蓮月はそれくらいのことならする人だった」と答えている。

○つねならぬ世はうきものとみつぐりのひとり残りてものをこそおもへ

○たちちねのおやのこひしきあまりにははかにねをのみなきくらしつゝ、

壇をこねて、茶器を、煎茶用の急須、徳利、盃、鉢、皿、茶碗、水指…などに自詠の歌を彫りつけた。これで生計をたてた。

○てずさびのはかなきものもちいで、うるまの市にたつぞわびしき

○あけたてば壇もてずさびくれゆけば仏をろがみおもふことなし

富岡鉄斎は、京都三条衣棚西入る太郎山町、祇園の中心地域に生れた。一八五〇の年頃、侍童として蓮月と同居、鉄斎の画がまだ独り歩きのおぼつかない時期、蓮月は、鉄斎のために歌を印した半切や短冊を数多作り、鉄斎がそれに合った画を描き加え、鉄斎の収入になる方を講じていた。

蓮月は、肉類はいっさい口にせず、かつお節さえ用いず、大根の葉を煮たものが好物と、粗食の人だった。衣類にもこだわらず、わずかなお金で足りたというが、飢饉に際しては、匿名で三十両を奉行所に差し出し、また鴨川の丸田町に橋がなく不便だったところに、独り資金を貯え、材を買い、人夫をやとい、車がすれちがっても渡れる幅の「丸田町橋」を架けた。

貧しい人々が困苦に喘ぐときは、粥施行所に喜捨し、月心和尚に観世音の仏画を描いてもらい、鳩居堂で売り、売り上げ金で餅を配った。

「世のため人のため」を忘れることがなかった。蓮月は八十五歳で歿した。桜大樹の下、鉄斎筆の「太田垣蓮月の墓」。

○ねがはくはのちの蓮の花のうへにくもらぬ月をみるよしもがな

## 編集室だより【二〇一四年 二月】

○根津美術館、和歌を愛でる展にゆく。土屋文明先生が住んでおられたところに近く、父と母と先生のお宅を訪ねた日思い出す。照子夫人がおもてなし下さり、先生は、庭の「むらさき」の鉢を持ちあげられて、この「根っこ」で紫色を染めることを教えて下さるのでした。

季節の移ろいや、心の微妙なありようを、31文字に託して詠む和歌は、平安時代から伝えられ、そこに私達が連なっていることを深く、ありがたく思うのでした。  
脇息きわきせに、もたれかかれる「柿本人麿像」からは離れられない思いでした。

○常緑の神の木々につつまれる明治神宮を詣でた。

○青山学院大学の学食。和食という分類の「わかめ、卵うどん」をいただく。学生達に混じり。

○ニューヨークも大雪に閉じ籠っていると、東京も、じつと家の中に居る。

○国立科学博物館。ゴビ砂漠の恐竜展。こんな凄いのが近くに来て下さるのだから、見逃さない。地球の上に、本当にいた「恐竜化石」に身が震える。今回はいろいろな恐竜のそれぞれの卵の化石があり、卵で終った命も思う。

○上野、東照宮の境内の「寒ぼたん」。雪、寒さにそなえ葉はの屋根に守られている。可愛らしく咲いていた。

○北とびあのプラネタリウムへ。おおいぬ座のシリウス、こいぬ座のプロキオン、オリオン座のベテルギウス。この三つの一等星を頂点とする正三角形が冬の大三角。天の川が縦断している。

○上野、東京国立博物館、平成館。平安から明治にかけた日本の多くの芸術が、米国クリーブランド美術館のコレクションになった。その名画達が日本に一時帰ってきた美術展。  
室町時代、雪村周継筆の「龍虎図屏風」に夢中。米国で大切に保管されているから安心する。

○池上梅園へ吟行。遠くから、近くから、梅の香の中の一。

○新井とく子さん、集大成の歌集を作られます。水島印刷所様がお世話下さっています。私が序文を書かせていただきました。タイトルも選ばせていただきました。もうすぐ素晴らしい歌集が出来上ります。

○東京での医学生を終えた父は、故郷に戻り、祖父の医家を継ぎ、故郷の学校の校医をつとめ、修学旅行に付き添った奈良で、一刀彫の雛壇を見つけました。今から85年前のことです。外国へ行ってしまう私に「もう会えないかもしれない」と、その雛壇を手渡して下さいました。日本に帰った私の部屋に飾ってあります。

○銀座四丁目交差点の喫茶店の二階の窓から、「銀座」を描いていました。小雨降る寒い日でしたが、ぬくぬく贅沢でした。

## 和菓子街道 (90)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

### 伊勢街道(13)

老舗の多く残る城下町・津をあとにして、旅を続ける。高茶屋の集落を過ぎ、両手に田畑が広がる静かな道を行くと、次なる島貫の宿に着く。『東海道中膝栗毛』では、島貫に泊まった弥次さん喜多さんが作者の十返舎一九と間違えられたり、こんにゃく料理に添えられた焼け石を食べそうになるという愉快的場面が描かれている。今の静けさからは、当時のそんな賑わいは想像もつかない。昭和初期までは津屋、京屋、大阪屋といった宿屋が残っていたようだが、今は商店ひとつない。

あっさりと島貫を過ぎ、雲出川を渡って先を急ぐ。かつては「素麺」や「白玉あめ」を売る店が沿道にあったというが、残念ながら今は店も何もなく寂しい限りだ。

誰ともすれ違わず不安やら寂しいやら。ひもじい思いをしながら、時



「右さんぐうみち」と彫られた道標。

折姿を現す常夜灯や道標に慰められながら先に行く。昔の人もこんな風に、次に茶店が現れるのを心待ちにせさせと歩いたのかもしれない。

## お知らせ

▽五月号の原稿は、四月一日(火)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。

郵便の休配(日曜、祝日)を考慮あわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は毎月の三河アラギ誌と共に返送しますので、返信用封筒は不用です。

## 原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A  
〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

## 編集後記

△四月号をお届けします。今は三月になつたばかりで、まだ寒い日もあるでしょうが、日の光りは何となく春の気配を感じさせます。

庭隅の路の臺も、淡いみどり色の包がほぐれて、いつしか小さい苔のかたまりが見えています。万作も黄色の花を付けて、寒空の下に咲きはじめました。

野山の草や木々は、季節ごとに美しい花を咲かせたり、実を付けたりして、私たちを楽しませてくれます。暖かい日には、野に山に出かけ、その時感じた思いを、三十二文字の短歌にしてみました。(山口)

## 三河アラギ規定

◇「三河アラギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アラギ」会員であることを必要とする。  
◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができます。

◇会員には毎月歌誌「三河アラギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半ヶ年分一万円、一ヶ年分二万円の割で前納されたい。ただし、購読会員は、半ヶ年分二千元、一ヶ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様たちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができます。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十六年三月二十五日印刷 第六十一巻 第四号  
平成二十六年四月一日発行 定価 六 百 円

### 編集部

岡本 八千代・小野 可南子・夏目勝弘

### 発行人

今泉由利

### 発行所

三河アラギ発行所 〒一四一〇〇三二  
東京都北区王子本町一の二六の六A  
TEL (〇三)五九二四一〇六五  
振替口座 〇〇八三〇一六一五六三九  
E-mail yur188@cronos.oon.ne.jp  
Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

### 印刷所

株式会社 核創美